

紹介

藤木久志編

『日本中世気象災害史年表稿』

本書は、凡例によれば、一〇世紀初めから一七世紀中庸にかけて、人々の生活と環境に大きな影響をもたらした、風損（大風）、水損（霖雨、洪水）、旱損（旱魃）、虫害（蝗害）、凶作、飢饉、疫病に関する中世の史料情報一四、〇〇〇件余りを、ほぼ原文のまま、年月日順に抄録したものである。

本書のもとになっているのは、科学研究費研究成果報告書『日本中世後期・近世初期における飢饉と戦争の研究』（研究代表者佐々木潤之介、二〇〇〇年）ならびに科学研究費研究成果報告書『日本中世における民衆の戦争と平和』（研究代表者外園豊基、二〇〇三年）であり、藤木氏は両者の科研に研究分担者として関わられ、両報告書に掲載されている情報を訂正・増補するかたちで、本書が刊行された。これまで科

研の報告書ということで入手困難だった基礎的年表を、高価とはいえない入手できるようになったことを喜びたい。また、両報告書では表記順や語句等で誤りが散見されたが、かなりの部分訂正され、また古文書等から増補されている箇所も少なからずある。しかし、まだ一部において、原文でなく書き下しで記されていたり、出典が統一されていないかたたりするのは残念である。また、月日未詳の史料をその年の一番最初に収録しているのはいかがなものであろうか。

『大日本史料』にならつて年の一番最後に収録するのが一般的なのではないだろうか。同類の先行書としては、小鹿島果編『日本災異志』（五月書房、一九八二年、初刊一九九三年）、権藤成卿『日本震災凶饉攷』（文芸春秋、一九三三年）、東京府社会課編『日本の天災・地変』上下（原書房、一九七六年、初刊一九三八年）、池田正一郎『日本災変通志』（新人物往来社、二〇〇四年）などをあげることができるが、本書ではこれらに比べ飛躍的に収載件数が増加し、利用しやすくなっている。また、本書はこれら先行書と異なり、災害の種類で分類することなく、時系列に従って原文どお

り掲載しているところに特徴がある。そのため、同時期にどのような災害が相次いだのか確認することが容易になっている。

藤木氏の『飢餓と戦争の戦国を行く』（朝日新聞社、二〇〇一年）はこの年表を利用した成果であるが、今後この年表をいかに活用していくかが課題になってくよう。年表では基本的に災害についてしか掲載されていないので、利用する場合にはその点留意し、歴史学としてはそうした自然災害に対してどのような対応がとられたかという点を追求することが重要になってくよう。こうした年表は「完璧」なものを作成するのは極めて困難であり、そのため書名も「稿」となっている。二度にわたる年表の公開で充実した年表となってきた際には、ネット上に公開して逐次更新したり、ウィキペディアのように多くの人の協力を得て史料を追加していくという方向を目指すことが今後必要になっていくのではないだろうか。

（A4判 四二七頁 二〇〇七年一月）

高志書院 税別二〇〇〇〇円）

（山田雄司 三重大学人文学部准教授）